

# 司書・司書教諭養成における 図書館パスファインダー作成演習の試み

工藤 邦彦

## 【要 旨】

本稿では、司書・司書教諭課程と司書講習で試みた図書館パスファインダーの作成演習を考察した。受講者は作成過程で図書館が所蔵する多様な情報資源の存在を認識し、主題に則した情報探索手順を理解したことが分かった。有能な新規司書・司書教諭養成のために、ビブリオグラフィック・インストラクションを意識した図書館パスファインダーの作成指導が必要である。

## 【キーワード】

図書館パスファインダー、情報資源、情報探索、司書および司書教諭養成

## はじめに

図書館に関する教育は現在、以下の四領域に分別できる<sup>1)</sup>。第一に、司書・司書教諭課程および講習における司書・司書教諭資格取得に向けた養成教育である。第二に、情報リテラシー教育を含んだ図書館利用指導である。第三に、資格取得に限らない一部大学院教育を含んだ図書館情報学教育である。第四に、正規・非正規を問わず現職図書館員に対する継続教育や職域研修である。なかでも司書・司書教諭課程設置大学における図書館に関する教育では、第一に該当する新規司書・司書教諭養成が中心となる。司書資格取得要件については、2008年の図書館法改正に伴う図書館法施行規則に基づき、2012年度から「図書館に関する科目」の履修が始動した。

「図書館に関する科目」は、表1のとおり必修科目として①基礎科目、②図書館サービスに関する科目、③図書館情報資源に関する科目があり、加えて本学独自の選択科目を設定している。

そのうち、②図書館サービスに関する科目では、情報資源の電子化や検索システムの高度化、利用者における情報ニーズの著しい変化を考慮した内容となった。具体的には司書が備えるべき情報検索技法やレファレンスサービスのスキル向上を図るため、従来の「レファレンスサービス演習」(1単位)と「情報検索演習」(1単位)をあらたに「情報サービス演習」(2単位)として統合した。「情報サービス演習」の履修内容は表2で示す。本稿では、新規履修内容である6) “発信型情報サービスの実際”にある“(パスファインダーの作成を含む)”に注目する。まずは図書館パスファインダーの定義について各図書館の作成経緯から概観する。

表1 司書資格取得に係る「図書館に関する科目」および本学開講科目一覧

区分	省令科目	単位	平成25年度本学開講科目 (大学・短大)
必修科目 甲群	①基礎科目	生涯学習概論	2 生涯学習概論
		図書館概論	2 図書館概論
		図書館情報技術論	2 図書館情報技術論
		図書館制度・経営論	2 図書館制度・経営論
	②図書館サービスに関する科目	図書館サービス概論	2 図書館サービス概論
		情報サービス論	2 情報サービス論
		児童サービス論	2 児童サービス論
		情報サービス演習	1 情報サービス演習Ⅰ (情報検索) 1 情報サービス演習Ⅱ (レファレンス)
	③図書館情報資源に関する科目	図書館情報資源概論	2 図書館情報資源概論
		情報資源組織論	2 情報資源組織論
		情報資源組織演習	1 情報資源組織演習Ⅰ (目録)
			1 情報資源組織演習Ⅱ (分類)
	選択科目 乙群	2科目2単位選択	図書館基礎特論
図書館サービス特論			1 図書館サービス特論 (手作り絵本制作)
図書館情報資源特論		1 図書館情報資源特論 (歴史資料特論)	
		1 〃 (大分の文学風土)	
図書・図書館史		1 【開講せず】	
図書館施設論		1 【開講せず】	
図書館総合演習		1 図書館総合演習 (よみ聞かせ・おはなし・ブックトーク)	
		1 図書館総合演習 (電子書籍制作)	
図書館実習		1 【開講せず】	

出所) 文部科学省生涯学習政策局社会教育課「図書館法施行規則の一部を改正する省令(平成21年4月)」掲載 電子政府の総合窓口 e-Gov <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S25/S25F03501000027.html> もとに作成

表2 ②図書館サービスに関する科目「情報サービス演習」履修内容

情報サービスの設計から評価に至る各種の業務、利用者の質問に対するレファレンスサービスと情報検索サービス、積極的な発信型情報サービスの演習を通して、実践的な能力を養成する。
1) 情報サービスの設計 (レファレンスサービスの体制づくりを含む)
2) レファレンスコレクションの整備
3) レファレンスインタビューの技法と実際
4) 情報探索の技法と実際 (各種データベースの検索演習や電子ジャーナルの活用)
5) 質問に対する検索と回答 (質問の分析と情報源の選択を含む)
6) 発信型情報サービスの実際 (パスファインダーの作成を含む)
7) 情報サービスの評価 (レファレンス事例の作成・評価を含む)

出所) 文部科学省生涯学習政策局社会教育課「図書館に関する科目の各科目の考え方: 図書館サービスに関する科目 4科目・8単位」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2013/01/07/1320992\\_6.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2013/01/07/1320992_6.pdf) を抜粋

## 1. 図書館パスファインダーとは

図書館パスファインダー (library pathfinders) とは、path (通り道、小道) と finder (発見者、探検者、開拓者) を合成したことばである。図書館における「情報探索の道しるべ」と呼ばれ、それぞれの図書館による情報発信活動の方法や手段と位置づけられてきた。本稿では以下、図書館パスファインダーをパスファインダーと記す。

パスファインダーの歴史的経緯を紐解くと、考案・命名者はアメリカ・マサチューセッツ工科大学図書館 (Massachusetts Institute of Technology 以下 MIT と記す) の司書 Marie P. Canfield (以下、Canfield と記す) である。1969年、Canfield は「初学者の即時のニーズに応えるさまざまなタイプの基本的資料をコンパクトにまとめたリストで、利用者の文献検索を一步步支援するツール」<sup>2)</sup>として利用者向けのリーフレットを作成した。MIT で最初に利用者へ配布したとされるジェームズ・マディソン・パーカー図書館のリーフレットでは、特定主題に該当する情報資源の著者名、タイトル、出版年、該当頁・章立て、検索語、所在等を記載した。リーフレットの内容として書誌事項と特定主題の探索方法の記載が必須であり、これを本稿ではリーフレット型パスファインダーと記す。利用者はリーフレットを携え、書架をブラウジングすることで必要な情報資源を効率よく見つけ出すことが可能となった。

昨今はインターネットの普及に伴い、ウェブサイトの利用を視野に入れた HTML (Hyper Text Markup Language) 言語形式や PDF 文書で印刷ができるパスファインダーを公開する図書館が増加した。Web 版、Web 上、電子と呼び方は様々であるが、本稿では Web パスファインダーと記す。表3で示すように、リーフレット型、Web を問わず、MIT に準拠したパスファインダーの条件としては、①から⑦まで全てを満たすことが要求されている。

表3 パスファインダーの条件

① 入門的な情報を入手するためのチェックリストである
② 様々なタイプの情報資源を提供する
③ 特定のトピックに焦点を当てたものである
④ 文献探索の初期段階における利用者を手助けするように工夫されている
⑤ 利用者の時間を節約する
⑥ 主題知識の乏しい利用者のためのガイドである
⑦ 網羅的な主題書誌ではない

出所) 愛知淑徳大学図書館インターネット情報資源担当 (2005) 『パスファインダー・LCSH・メタデータの理解と実践：図書館員のための主題検索ツール作成ガイド』愛知淑徳大学図書館刊 p3 より転載

ところで、我が国におけるリーフレット型パスファインダーの創案は、1995年に北海道石狩地区の高等学校に勤務する学校司書グループである石狩管内高等学校図書館司書業務担当者研究会が行った<sup>3)</sup>。同研究会の活動は、近隣の短期大学図書館や市立図書館とも連携のうえ、“パスファインダー倶楽部・北海道”<sup>4)</sup>へと引き継がれた。

2002年、我が国でいち早く MIT 準拠による Web パスファインダーを構築、公開したのが愛知淑徳大学図書館である。同館ではパスファインダーを「利用者が特定の主題に関する情報収集を図書館で行う際の最初のとっかかりとなる図書館資料のガイドもしくは要チェックリストのようなもの」<sup>5)</sup>と位置づけた。以降、図書館が所蔵する多様な情報資源を用い、利用者が効率よく必要とする情報を探することができるナビゲーションツールとしての役割を担っている。

## 2. 研究の背景と目的

まずは、公共・大学図書館業務の視点からパスファインダーを提供する背景を確認する。

文部科学省は公共図書館の在り方について、2006年に「これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして」を公表した。そのなかで図書館ウェブサイトは情報源を案内する地域のポータルサイトとして、文献探索・調査案内（パスファインダー）、OPAC、リンク集、レファレンス回答データベース、主要文献・機関リスト等の掲載が求められた<sup>6)</sup>。これにより、利用者に向けた有用なコンテンツのひとつとしてパスファインダーが正式に位置づけられたといえる。

大学図書館では2010年に文部科学省科学技術・学術審議会がとりまとめた「大学図書館の整備について：変革する大学にあって求められる大学図書館像」において大学図書館職員に求められる資質・能力が示された。ここでは特定主題に関する資料を探すための道標となるパスファインダー作成が資料を熟知した職員の専門性を発揮する部分と位置づけ、作成されたパスファインダーが全授業科目に適用できるツールとなるよう促した<sup>7)</sup>。いわば職員の大学教育への積極的関与が期待された提言といえる。このように、図書館の現場では情報サービスや利用者教育、学習支援の観点から司書・司書教諭によるパスファインダー作成、公開の機運が高まりつつある。

次に、パスファインダーに関し図書館情報技術を駆使したデジタル的な作成技法の研究成果を除く<sup>8)</sup>、司書・司書教諭自らが作成、公開する視点に立った先行研究を挙げる。

第一に、パスファインダーの作成に至る経緯やマニュアル・手順の公開、情報資源の選択基準についての考察がある。日本図書館協会図書館利用教育委員会委員であった丸本郁子らは、パスファインダーを「ある特定のトピック（主題）に関する資料・情報を収集する際に、関連資料の探索法を一覧できるリーフレット」<sup>9)</sup>と定義し作成方法を提示した<sup>10)</sup>。また仁上幸治は、私立大学図書館協会企画広報研究部会の活動を通し、パスファインダーとして備えるべき要件に①特定のトピックを扱うこと、②ナビゲーション機能があること、③資料や情報源の一覧性があること、④簡便に情報へアクセスできることを挙げ、司書であれば簡便に作成できる手順を示した<sup>11)</sup>。これ以降に公開された各図書館の作成事例は丸本や仁上の作成技法を概ね踏襲している。

第二に、パスファインダーの蓄積状況についての考察がある。国内の公共図書館におけるWebパスファインダーの現況については2008年に国立国会図書館主題情報部（以下、国会図書館と記す）の伊藤らの調査<sup>12)</sup>がある。結果、公共図書館内における作成・提供態勢が人的に整備されていない点、図書館相互の協力が乏しい点を明らかにした。

第三に、パスファインダー作成の有効性についての事例研究がある。村上詠子<sup>13)</sup>は、司書教諭科目受講者を対象にレポート・論文作成支援を目的としたリーフレット型パスファインダーの作成を試みた。これは作成過程における受講者の情報検索技術向上やメディア活用能力育成から有効性を検証した研究である。質問紙調査の結果、パスファインダーが情報探索の設計図に成り得ると結論づけたが、資格取得の視点に立った具体的な有効性の検討までは行っていない。

そこで、本稿では受講者に向け新規司書・司書教諭養成を意図した作成演習を試み、作成過程から指導の方向性を確認のうえ、発信型情報サービスの提供で必要とされるスキルを考察する。

## 3. パスファインダー作成演習の試み

### 3. 1 作成演習の検討

筆者は表4に示すように、司書科目に発信型情報サービスが組み込まれる以前の2008年度から司書講習科目「レファレンスサービス演習」および発信型情報サービス提供の範疇にある司書教

論科目「学習指導と学校図書館」や司書補講習科目「レファレンス資料の解題」でパスファインダー作成演習を試みた。演習形式は個人・グループでの作成を適宜織り交ぜながら実施した。

表4 司書・司書教諭課程・講習におけるパスファインダー作成演習実施状況

開講年度 (時期)	開講大学名 講習名(司書・司書教諭)	科目名 (実施科目名)	作成演習形式 <sup>注)</sup>		作成数 (点)
			個人	グループ	
2008年度夏季	別府大学(司書講習)	レファレンスサービス演習	×	○	9
2010年度後期	久留米大学教職課程	学習指導と学校図書館	○	×	21
2011年度前期	久留米大学教職課程	学習指導と学校図書館	○	×	16
2012年度夏季	別府大学(司書講習)	情報サービス演習	○	○	50
2012年度後期	別府大学司書課程	情報サービス演習Ⅱ	○	×	44
2012年度後期	久留米大学教職課程	学習指導と学校図書館	○	×	11
2013年度夏季	大分大学(司書教諭講習)	学習指導と学校図書館	○	×	10
2013年度夏季	別府大学(司書補講習)	レファレンス資料の解題	○	○	29
2013年度夏季	別府大学(司書講習)	情報サービス演習	○	○	33
2013年度前期	別府大学司書課程	学習指導と学校図書館	○	×	8

注) 作成演習形式(個人・グループ)における○は実施。×は未実施を示す。

作成演習を始めるにあたり、表5に示すように、図書館の公式ウェブサイトから発信しているWebパスファインダーへアクセスし内容を確認した。以下、各々の特徴をみていく。

第一に、国会図書館提供の集積状況公開サイト『調べ方マニュアル』を挙げる。該当するのは、ポータルサイトのコンテンツである『レファレンス協同データベース・調べ方マニュアルデータ集』<sup>14)</sup>と関連する全国の都道府県立、政令指定都市立図書館の調べ方ツールである『公共図書館パスファインダー(調べ方案内)リンク集』<sup>15)</sup>である。

第二に、協同分担サイトである。具体的には、私立大学図書館協会東地区部会が運営している『パスファインダーバンク』<sup>16)</sup>を指す。文字通り“バンク”と名付けていることから複数の図書館で共同利用できるツールを目指し、2004年に運用を開始した。

第三に、ソーシャルメディアを意識した最新事例である。Webでの展開に適したSBM(ソーシャルブックマーク)の機能を活用した結城市民情報センター、作成担当者の顔が見えるプロフィールボックスに特徴がある米国Springshare社提供のLibGuides(リブガイド)を採用した九州大学附属図書館などが挙げられる。

#### 集積状況公開サイト

名称	作成機関等	特徴
レファレンス協同データベース・調べ方マニュアル	国立国会図書館	国立国会図書館主題情報部が日々のレファレンス業務の中で蓄積した、特定テーマの調査に役立つ資料や調べ方のノウハウを提供している。

#### 協同分担サイト

パスファインダーバンク	私立大学図書館協会東地区部会 研究会研究分科会	各館で独自に作成しているパスファインダーをアップし、データベース化を図る試み。カスタマイズできるよう作成の雛形も提供している。
-------------	----------------------------	---



ナビゲーションツールとしてのパスファインダー

パスファインダー	愛知淑徳大学図書館	下調べ、情報集め、有用なサイトやリンクと情報探索の手順をふまえた作りとなっている。
----------	-----------	---

地域情報パスファインダー

地域についての調べ案内	滋賀県東近江市立図書館	市内7つの図書館における「東近江を知る」というコンセプトに沿い、郷土・地域行政サービス事業グループ所属の司書が作成している。
-------------	-------------	--

パスファインダーパッケージ（雛形）採用事例

LibGuides（リブガイド）	九州大学附属図書館	米国 Springshare 社提供。作成した担当者個人が提供するガイド形式。
------------------	-----------	---

SBM（ソーシャルブックマーク）採用事例

ゆうき Web パスファインダー	結城市民情報センター	“はてなブックマーク”を採用した点がユニークである。
------------------	------------	----------------------------

大学図書館利用ガイド（シラバス連携型）

授業支援ナビゲーター	千葉大学附属図書館	授業で学ぶ内容の基本的な知識が得られる図書や Web サイトなどの情報源やキーワードをコンパクトにまとめたリスト。
------------	-----------	---

表5 作成演習で確認した各種 Web パスファインダー

以上、列挙したなかから利用対象や主題内容を考慮した結果、以下の3種を演習に適した参照候補とした。

- ①私立大学図書館協会『パスファインダーバンク』
- ②愛知淑徳大学図書館『パスファインダー』
- ③千葉大学附属図書館『授業支援ナビゲーター』

①は『初めての人のパスファインダー作成マニュアル』<sup>17)</sup>を用意しているため、作成初心者向けで多くの図書館が導入時に採用している。②はMITに沿った世界標準であり、③は大学図書館で多くみられるシラバス連携型の模範事例として国立大学図書館を中心に普及している。

3種の候補から、演習におけるパスファインダーの作成手法として、①を基本としたリーフレット型を採用した。加えて、②の特徴である統制語彙としての件名標目を援用することで情報探索の流れを重視した作成を目指した。作成過程で最も重要な要素は、情報探索の根幹となる特定主題の決定にある。よって演習では身近な疑問、興味関心がある事柄などを中心に自由に主題を決定するパターン、テーマやトピックを決定する一助として新聞原紙を配布のうえ、記事から主題を抽出するパターン、事前に提示した大きな題目（演習で提示したトピックの例：『戦争と平和』）から想起できる主題を導くパターン、計3通りから受講者数や日程を勘案し選択した。授業概要は表6のとおりである。ガイダンス時、受講者には図1に示した「パスファインダー作成演習用素案づくりシート」（以下、「素案づくりシート」と記す）を配布した。

表6 パスファインダー作成における授業概要（グループ演習形式）

演習回数	内 容
1	ガイダンス（グループ分け、役割分担確認）、講義（パスファインダー作成の目的）
2	図書館内でのブラウジング（所蔵参考図書の配架状況、内容確認）
3	パスファインダー「素案づくりシート」の作成（主題決定、キーワード選定など）
4	「素案づくりシート」内容発表（各グループによる中間報告）、シート加筆修正
5	PowerPoint または Word によるパスファインダー作成の実際
6	パスファインダー作成物のグループ発表、講評

(学科・学年・学籍番号)	氏名
	班
情報発信する利用対象： できる限り、明確に定義すること	
選定した主題（テーマ、トピックなど話題）○○についての調べ方	
スコープノート（Scope note 主題を簡潔に表した説明文 主題の範囲を明確にするために書くもの。）	
選定した主題を探索するうえで必要なキーワード（検索語）	
パスファインダーを使うことによって利用者が得られる効果・期待を記載のこと	
主な入門書の書誌事項：参考図書を中心に記載のこと	
主題を発展して調べるために必要な情報資源の書誌事項 雑誌・論文記事・ウェブ情報源などを記載のこと。	

図1 パスファインダー作成演習用素案づくりシート（A4版）

### 3. 2 演習における作成手順

図2に示した作成手順に沿い、受講者に対しOPAC（蔵書検索）や検索エンジン等で情報資源の探索指導を適宜行いながら、「素案づくりシート」（図1）の記入を課した。以下、受講者のシート記入事例をもとに具体的な作成手順（1）から（8）について考察する。

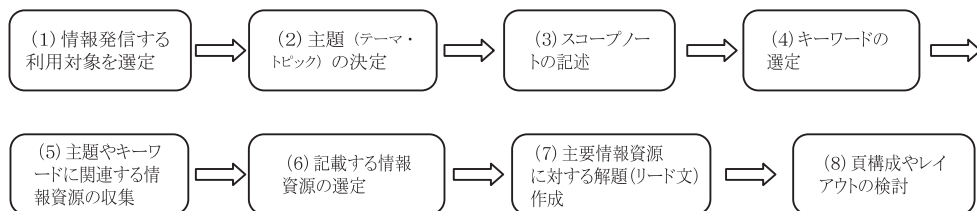


図2 演習におけるパスファインダー作成手順

#### (1) 情報発信する利用対象を選定

表7-1に示すように、作成の導入時に利用対象を精緻に定め、情報探索者がパスファインダーを使うことによって得られる効果・期待をイメージする。ここでは適切な主題（テーマ・トピック）を決定する流れを作ることが重要となる。

表7-1 利用対象等記入例 (抜粋)

<p>(2013年9月5日～9日 別府大学司書講習「情報サービス演習(レファレンス)」受講者記載のまま)</p> <p>*利用対象 大分県中津市内に住んでいる、小学校高学年～中学生とその保護者へ向けて</p> <p>*情報探索者がパスファインダーを使うことによって得られる効果・期待 パスファインダーを使うことにより、調べたいテーマの道すじとなり求める情報へ簡単にはやくたどりつくことができます。</p> <p>*主題(テーマ・トピック) 「八面山平和公園 身近な戦争遺跡を調べてみよう!!」</p>
--

(2) 主題(テーマ・トピック)の決定

主題を決定するうえでは、必ずしも統制語彙に限定せず、トピックといった時事的な話題も含め広範囲に捉える。なお、実際には公共図書館における情報サービスの局面では、カウンターで受けたレファレンス質問の記録を、大学・学校図書館の学習支援であれば、授業で課されたレポート題目を考慮し決定することが求められる。しかし、演習では受講者の興味関心を優先する。なお、表7-2に示すように、受講者には新聞記事を読み主題を抽出するなど探索条件を予め提示した方式が、一定の粒度(例えば『日本十進分類法(NDC)』第二次区分程度を指す)をもった主題や問題提起を伴った適切な主題を決定する傾向がみられる。

表7-2 新聞記事から抽出、決定した主題(テーマ・トピック)一覧

<p>*主題(テーマ・トピック) 2013年夏季大分大学司書教諭講習「学習指導と学校図書館」受講者決定分</p> <p>就職と結婚 企業内発明と特許権 個人情報(ビックデータ) 化粧品 国際協力 大分県の自然エネルギー 「働く」を考える 情報社会の規制と法律 これからの日本社会の働き方をどう変える 年金問題とそこから見えてくる日本の現状</p>
---

(3) スコープノートの記述

スコープノート(Scope note)とは、主題を簡潔に表した説明文を指す。情報探索者が主題に関する調査を行う際の一助となるべく主題の持つ領域・範囲を明確にするために記述するものである。演習では、百科事典および主題に関連する専門事典を確認したうえで、100～200字程度にまとめる。表7-3に示した例では定義を説明のうえ、「在住外国人」や「母語」に関する基本的事項が記載されている百科事典、新語辞書を使い下調べすることを推奨している。

(4) キーワードの選定

キーワードとは、主題に関連した基本的な参考図書を探す際の「検索語の候補」を指す。選定作業では基本的な辞書、百科事典、雑誌・新聞記事に目を通し、複数抽出する。なお、選定にはWeb NDL Authorities<sup>15)</sup>に存在する普通件名といった統制語彙と照合する。

表7-3 スコープノート記述およびキーワード選定例 主題:「多文化の人々」の場合

<p>【スコープノート】「多文化の人々」とは ここでいう「多文化の人々」とは、日本語を第一言語としない人々を指します。外国人労働者、留学生・就学生、日本人との国際結婚によって新しく来た外国人とその子どもです。日本経済のグローバル化に伴い、その数は増加傾向にあります。</p> <p>【キーワード:検索語の候補】 在住外国人、ニューカマー、第一言語、母語、多文化化</p>
---



## (5) 主題やキーワードに関連する情報資源の収集

「素案づくりシート」(図1)の記入に際し、基本文献にあたることが可能な参考・一般図書、ネットワーク情報資源など表7-4に示すように、多様な情報資源を収集する。

表7-4 情報資源の収集対象例

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入門的な参考図書 (百科事典、国語辞典、用語集・索引、年表、便覧、ハンドブック等)</li> <li>・ 特定主題に該当する一般図書</li> <li>・ 雑誌タイトル・記事や新聞タイトル・記事</li> <li>・ 特定主題について詳細が分かる参考図書 (専門的辞書・事典、年報・白書・統計類)</li> <li>・ ネットワーク情報資源 (信頼性の高いウェブサイト、データベース、電子ジャーナル)</li> <li>・ 類縁機関 (博物館、文書館、文学館、学協会や各種団体、専門家等) の制作物</li> <li>・ AV 資料 (DVD、ビデオ類) やマイクロ資料</li> </ul>
---

## (6) 記載する情報資源の選定

(5) で収集したなかから、パスファインダーに記載する情報資源を選定する。その際には①出版年月、調査対象年月、ウェブサイト更新日からカレントな情報であるかの判断、②信頼できるレファレンスツールかどうか編著者や出版者の見極め、③参考図書に記載の凡例・目次および排列や図表の確認、といった情報資源の客観的評価を行う。

## (7) 主要情報資源に対する解題 (リード文) 作成

(6) で選定対象とした情報資源は書誌事項を付記する。特に主題に対する情報探索で利用価値があると判断した主要情報資源には解題を付す。演習では表7-5に示すように、受講者に対し書誌事項 (タイトル、版表示、出版者・社、出版年) の付記に加え、館内コーナー展示で用いられるキャプションに該当するリード文の作成を促した。

表7-5 書誌事項およびリード文記入例

「戦争」についての調べ方 百科事典で概略を学ぼう！ (2013年9月5日～9日 別府大学司書講習「情報サービス演習(レファレンス)」受講者記載のまま)		
タイトル・版表示	出版者・社	出版年
世界大百科事典 改訂新版	平凡社	2007
日本大百科全書 初版	小学館	1987
ブリタニカ国際大百科事典 第二版改訂	ティビーエス・ブリタニカ	1994
【リード文】時事問題、人文科学、自然科学、社会科学、芸術など、幅広い分野の知識や事柄を、項目ごとに整理・記述して、簡潔にまとめたもの。調べものをする際にはまずこれに当たるとよい。戦争についてはそれぞれの事典で多くのページをさき、辞書的な意味の他に、歴史的にどのような経緯をたどっているか、その変遷も記している。		

## (8) 頁構成やレイアウトの検討

初心者が手に取りやすい頁構成を心がけ、情報資源の有用度を示すランク付け (★マークの付与)、文字フォント、バランス、彩色等レイアウトやデザインに配慮することが大切である。図3に示したパスファインダーは easy-to-read (読みやすくわかりやすい) を意識した作りになっている。



に関する部分を抜粋して表8に示す。

表8 作成演習を受講した司書補講習および司書講習受講者の所感（抜粋）

【資格取得に向け受講者自身が作成を通して得たスキル】（受講者記載のまま）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・一つのテーマについて広くより深く関わる事ができてノウハウを身につけられた。</li> <li>・どの本を探せばよいか分かるようになった気がします。</li> <li>・テーマについてよく考えることができ、どんな資料があるのかというのが、わかった。</li> <li>・調べる力が得られる。どのように作成したら利用者にわかりやすく伝わるか考えるスキルが得られる。</li> <li>・どの分野でどのような参考資料があるのか分かった。</li> <li>・選書はしたことがなかったので、「どんな本を利用者にとって適切か」という視点から本を見るスキルが少しは養えたと思います。</li> <li>・希望にあった本をさがす能力や本の紹介の書き方などのスキルが身につきました。</li> <li>・参考図書や専門図書の種類や内容を見分ける練習になったと思います。</li> <li>・テーマについて調べまとめる力がついたと思います。</li> <li>・スコープノートで特に感じたことですが、あるテーマ・トピックについて自分たちで要約する力がついたと思いました。</li> <li>・利用者の立場でひとつのテーマを調べてまとめる力がつきました。</li> </ul>

### (3) 所感から得た知見

作成演習を通し受講者の多くが図書館に所蔵する多様な情報資源の存在を改めて知る契機となり、同時に特定主題に関わる情報探索手順を理解したことが分かった。また、資格取得に向け必要なスキルについて、受講者は①利用者の情報探索に則した適切な情報資源の選定、②解題作成やスコープノートの記述をはじめとする主題分析の二点を意識していた。

その反面、作成過程では主題を決定しても、スコープノートの記述には受講者で精粗があり、主題の領域や範囲を把握することが理解し難いケースも見られた。よって、主題分析を適切に行うことができるよう、図書館情報資源に関する科目では件名法の理解や統制語彙の運用に重点を置き指導する必要がある。なお、所感には「パスファインダーの存在を知らなかった」、「授業を通して初めて知った」、「パスファインダーという言葉自体が難しい」という意見も寄せられ、利用者への普及は未だ途上段階にあることを把握した。

以上から、パスファインダー作成演習では、利用者に対し情報資源を効果的に活用する方法を理解させる指導方法であるビブリオグラフィック・インストラクション<sup>20)</sup>を意識することが最も重要であることが分かった。以下、ビブリオグラフィック・インストラクションを行ううえでの受講者に対する具体的な方向性を二点示す。

- 第一に、書架でのブラウジングから参考図書の特性を把握し、文献調査の術を習慣づけること。
- 第二に、地域情報資源の拡充という視点に立ち、図書館が発信できる地域主題を創成すること。

参考図書の取扱いを第一に挙げたのは、演習で行う情報資源収集の局面において、参考図書と一般図書との区別が付かない受講者が目立ったことに起因する。手に取った資料が何故、禁帯出図書となっているのか、貴重書・準貴重書となる選定基準は何かなど、図書館情報資源の特性や種別を理解することは司書・司書教諭の業務遂行にあたり、第一義に求められるスキルである。

第二の地域主題の創成については、マンガの世界においてパスファインダーが登場したことに着目する。埜納タオ著『夜明けの図書館2』では、主人公の公立図書館司書が「郷土関係のパスファインダーを充実させて、さらに役立つ図書館に<sup>21)</sup>とつぶやくなどエンディングで司書の使

命を描写した。今後、地域の図書館は基本その地域でしか探索できない主題を選定し提供する“地域情報パスファインダー”<sup>22)</sup>の創成が求められており、演習における主題決定についても地域の特性を考慮する必要がある。

利用者が図書館の多様な情報資源を用い、特定主題について探索するうえで信頼できるナビゲーションツールとして、パスファインダーの需要は高まっている。今後も新規司書・司書教諭養成に際する発信型情報サービスのスキル向上を図るうえでも作成演習を行う意義があると考えらる。

## おわりに

本稿では、筆者の担当科目におけるパスファインダーの作成演習について考察した。しかしながら、グループ演習での作成過程における役割分担やウェブサイトへの公開手順まで検討しきれていない。図書館の現場では一般的に日常業務とは別途ワーキンググループを立ち上げ、作成に着手している。よって、職員数が多数の大規模図書館での作成事例を参考に業務内容の検証を行い、そのノウハウを演習に反映させ指導していくことを、今後の課題と考えたい。

### 【謝辞】

考察の対象としてご協力いただいた司書課程・講習受講者に謝意を表します。

### 【註・参考文献】

- 1) 糸賀雅児 (2003) 「第29期図書館学教育部会の発足にあたって：図書館学教育の適正なバランスを」『日本図書館協会図書館学教育部会報』67. 1-2
- 2) Canfield, Marie P. (1972) Library pathfinder. *Drexel library quarterly*. Vol. 8 287-300
- 3) 石狩管内高等学校図書館司書業務担当者研究会 (2007) 『パスファインダーを作ろう：情報を探す道しるべ』(学校図書館入門シリーズ12) 全国学校図書館協議会
- 4) 「パスファインダー倶楽部・北海道」  
<http://www.educ.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/pass/index.html> (accessed 2013-11-06)  
北海道は長年にわたり、図書館利用者支援の方途としてパスファインダーを積極的に提供している“先進地域”である。
- 5) 鹿島みづき・山口純代 (2002) 「図書館パスファインダーに見る次世代図書館の可能性」『情報の科学と技術』52 (10). 526-537
- 6) 文部科学省主導で2006年7月から2007年3月にかけて、「これからの図書館の在り方検討協力者会議」において中長期的な図書館経営の方向性が示された。  
これからの図書館の在り方検討協力者会議 「これからの図書館像-地域を支える情報拠点をめざして(報告)」[http://warp.ndl.go.jp/infondlj/pid/286794/www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/04/06032701/009.pdf](http://warp.ndl.go.jp/infondlj/pid/286794/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06032701/009.pdf) (accessed 2013-11-06)
- 7) 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について(審議のまとめ)-変革する大学にあって求められる大学図書館像-」  
<http://www.janul.jp/j/documents/mext/singi201012.pdf> (accessed 2013-11-06)
- 8) 図書館パッケージの援用やプロトタイプシステム構築に基づくキーワード抽出といったパスファインダー自動作成支援システムの検討は、図書館情報技術の領域で一連の研究が存在する。だが、本稿では図書館に勤務する司書・司書教諭や資格課程受講者自らがパスファインダーを作成する事例研究のみを考察対象と

した。

- 9) 丸本郁子・椎葉もと子 (1989)『大学図書館の利用者教育』(図書館員選書27) 日本図書館協会
- 10) 日本図書館協会図書館利用教育委員会 (2003)『図書館利用ハンドブック：大学図書館版』 日本図書館協会
- 11) 仁上幸治 (2005)「電子パスファインダをどう作るか：情報探索支援ツールの企画から公開まで」『短期大学図書館研究』 25. 59-70
- 12) 伊藤白・小澤弘太 (2008)「国内における Web 上パスファインダーの現況調査」『情報の科学と技術』 58 (7). 361-366
- 13) 村上詠子 (2008)「パスファインダー作成の有効性：情報検索・メディア活用能力の育成」『目白大学短期大学部研究紀要』 44. 155-179
- 14) 国立国会図書館『レファレンス協同データベース・調べ方マニュアルデータ集』[http://crd.ndl.go.jp/jp/library/documents/selected\\_reference\\_guides.pdf](http://crd.ndl.go.jp/jp/library/documents/selected_reference_guides.pdf) (accessed 2013-11-06)
- 15) 国立国会図書館『公共図書館パスファインダー (調べ方案内) リンク集』[http://rnavi.ndl.go.jp/research\\_guide/pubpath.php](http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/pubpath.php) (accessed 2013-11-06)
- 16) 私立大学図書館協会東地区部会研究部研究分科会『パスファインダーバンク』[http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kikaku/pfb/pfb\\_frameset.htm](http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kikaku/pfb/pfb_frameset.htm) (accessed 2013-11-06)  
同サイトに Last/Update2008/4/23の日付があり、近年更新がなされていない。
- 17) 私立大学図書館協会企画広報研究分科会 (2003)『初めての人のパスファインダー作成マニュアル』<http://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kikaku/pfb/pf/manual/manual.pdf> (accessed 2013-11-06)
- 18) 国立国会図書館の典拠データ検索・提供サービスを指す。  
<http://id.ndl.go.jp/auth/ndla> (accessed 2013-11-06)
- 19) 石井保廣・工藤邦彦 (2013)『情報検索演習：フリーサイトでスキルアップ第8版』 佐伯印刷
- 20) パスファインダーがビブリオグラフィック・インストラクションのツールとして有効であることを指摘した論文としては、次のものがある。小嶋智美 (2006)「医療分野における図書館パスファインダーの可能性を探る」『薬学図書館』 51 (1). 53-58
- 21) 埜納タオ (2013)『夜明けの図書館2』(ジェールコミックス) 双葉社  
公立図書館におけるレファレンスサービスを題材にしたライブラリーコミック (全2巻) である。
- 22) 地域情報パスファインダーの公開事例として、いわき市立図書館『地域資料パスファインダー』、長崎市立図書館『地域(長崎)関連パスファインダー (調べ方ガイド)』などがある。